
魔法戦記ウィザリア

三浦一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記ウィザリア

【Nコード】

N3646Q

【作者名】

三浦一平

【あらすじ】

この広い宇宙には様々な世界が連なり、隣り合って存在している。

精霊の住む世界、物語に出てくるような獣の住む世界、

魔法と呼ばれる不思議な力が存在する世界

この物語は、魔法の存在しない世界に住む少年が魔法と出会い、人々と絆を結んでいく物語である！！！！

序章 すべての始まり（前書き）

この小説は作者が僕と彼女に降る夜（ファンタジア文庫）と魔法少女リリカルなのはシリーズに影響を受けて書いたものです。

あれ？これ見たことある！ってものもあると思いますがそこは目をつむって下さい。

決して作者がちゃんと考えなかったからじゃありませんよ！！

序章 すべての始まり

夜、港の倉庫群。いつもは暗く静かなそこは今日に限っては違った。眩い光が瞬き、辺りを明るく照らし出す。

それに一瞬遅れて幾重にも重なり轟音が鳴り響く。

しかし、それに気づく者は一人もない。

夜だというのに空は不気味な虹色に輝き、ドーム状の空間を作り出している。

その中では明らかに周りとは違う、異質な一人の少女と一匹の獣が戦っていた。

獣は今、地球に存在する生物では例えようのない姿をしていた。

全身が黒い、それこそ夜の闇より暗い漆黒を固めたような体躯に鋭い牙を覗かせながら、血のように紅く爛々と輝く瞳で少女を見ている。

少女は赤と白を基調としたズボンと上着、そしてコートを羽織っている。

それだけではただの奇抜なファッションで済むかもしれないが、

何より少女の異質さを際立たせているのは、右手に握られた幅の広

い剣の存在だろう。

白い刀身と柄に紅い宝石をはめ込んだ美しい剣は幾度の打ち合いで細部に亀裂がいくつも発生している。

紅の混じる金髪も同様に長い戦いで汗と汚れにまみれて、本来の輝きを無くしてくすんでいる。

それでも少女の青い瞳は戦意を失っていないかった。

「オオオオオオオッ！！」

獣が咆哮を上げて少女に飛びかかる。

「ハッ！」

鋭い息を吐きながらそれを少女は避け、相手と交差するのに合わせて剣を振るう。

獣は咄嗟に身をよじるが剣先が僅かにかすめる。

「グオオオオオオッ！」

苦悶の声を上げながら怒りに満ちた視線を少女に向ける。

それと同時に獣の前に赤い幾何学模様の光りが現れた。

魔法陣と呼ばれるものだ。

赤い魔法陣は高速で回り始めて更に輝きを増す。

「ッ！！イフリート！」

『p r o t e c t i o n』

呼応するように剣のつかの宝石から男の声が放たれた。

少女の目の前にも獣が作り出したのと同じ様な紅の魔法陣が発生し、回り始める。

そして一人と一匹は交錯し、眩い閃光が辺りを包み込んだ。

少年は逃げていた。いや、実際に何かに追われているのではなく

目の前の受け入れがたい現実から逃げていた。

「一体これはなんなんだよ、何が起きてるんだよ?!」

そう叫ばずにはいられない光景がそこには広がっていた。

夕焼けに染まる学校帰り、異変に気付いたのはその時だった。

いつもなら帰宅する会社員や学生の姿で混雑する駅前の広場に

人が一人も居なかったからだ。

その代わりに一人の女の子と一匹の黒い獣が対峙していた。

女の子の方は紅の混じった金髪をなびかせながら剣を構え、

黒い獣は四足で地面を踏み締め、血のように赤い瞳を爛々と輝かしている。

明らかに現実離れた光景に思わず少年は後ずさってしまう。

カッッ。

後ずさった足が小石を蹴飛ばす。

普段なら誰も気付かないような小さな物音、

しかし普段とは遠くかけ離れたこの異質な空間でそれは、致命的な物音となった。

音に気付いた黒い獣が少年の方を向く。

つられて少女の瞳も少年の姿を映し出した。

「えッ！なんで現地住民がこの空間に！？」

少女の驚きの声、その声と同時に黒い獣が咆哮をあげ、少年に向かって突進してきた。

それは決して目で追いつけない程早いというものではないが突然の事に

少年の足はすくんで動こうとはしない。

黒い獣が牙を剥きだして少年を噛み砕こうと迫ってくる。

「うわわわわああ!!」

少年が恐怖に目をつむる直前に見たのはいつもの真っ赤な夕焼けではなく、不気味な虹色の空だった・・・

序章 すべての始まり（後書き）

意見を元に行間修正しました！

これからも意見よろしく願います！

第一章 出会い 1（前書き）

導入部分の開始です！

戦闘シーンを期待している読者の方はもう少し待っていて下さい！

それでは第一章 出会い 1、どうぞ！――！

第一章 出会い 1

夢を見ていた。夢だと分かる夢、明晰夢というやつだ。

広い映画館のような所でポツンと一人で座っている。

スクリーンでは黒い獣と紅の混じった金髪の少女が剣を片手に戦っていた。

現実ではありえない光景、しかしこれは夢、ありえない事はいくらでも起こる。

スクリーンの中では一人と一匹が何度も交錯していたが、

黒い獣と少女が激しくぶつかり合い、眩い光に包まれたところで途絶えた。

それと同時に周りの光景も幻のように消え失せる。

漆黒の闇。その中でそれは輝いていた。

サファイアのような青い宝石。でもそれが放つ輝きは、

普通の宝石が放つ冷たい輝きではなく、陽だまりのような優しい輝き。

目の前にあるそれを手に取るとそれは手の中でトクンと小さく脈動した。

(・・・暖かい)

そう感じた瞬間、その宝石は一層明るい輝きを放ち胸の中に飛び込んでくると、そのまま体の中へ入っていった。

意識にノイズが走る。目覚めが近いようだ。

全身の感覚が無くなり始め、視界が揺らぐ。

『・・・助けて』

その中で俺は、確かに誰かの声を聞いた。

「ジリリリリリリッ！！！」

目覚ましが早く起きるとうるさく鳴り響く。

朝の日差しが窓から差し込み、外では小鳥たちが鳴いていた。

「・・・なんか、変な夢だったな」

目覚ましを止めて周りを見回す。

そこはもちろん漆黒の闇に包まれた空間ではなく、

PCや本棚、イスに脱ぎっぱなしの制服が掛っている俺の部屋だっ

た。

漆黒の闇を集めたような化け物と紅の混じる金髪の美しい少女の戦う夢。どこかの物語のような者達の夢。

それに最後に見た青い宝石。

「何か言ってたよな・・・」

夢の終わり、確かに何かを言われたような気がしたのだが、思い出す事が出来ない。

未だ見た夢から完全に覚められずにベットの上でボーっとする。

しばらくそうしていると、カチャリという音が聞こえた。

この時間帯でこの部屋に来るのは一人しかいない。

「・・・トキ君、起きてる？」

制服姿の幼馴染、折原陽菜だった。

両親が居ない俺に家族同然に接してくれた、折原家の一人娘。

家が隣同士だった事もあり、よく家に来てはご飯の用意や家事を手伝ってくれたりする。

「あ、もう起きてるみたいだね。朝ご飯出来てるから、早く準備してね」

「ん、分かった」

俺の返事に満足そうに頷くとスカートの端を翻しながらドアを閉める。

時計を見ると少し余裕がある。

「もうちょっと寝かせてもらお・・・」

「二度寝は駄目だからね」

温かい布団の誘惑に負けそうになったところを戻ってきた陽菜が夕イミングよく注意する。

「・・・はい」

そう返事をするが陽菜は立ち去ろうとしない。

どうやら俺がベットから出るまで見張っているつもりようだ。

そんな幼馴染の視線に耐えきれなくなり俺はしぶしぶベットから降りる。

それを確認した陽菜が

「早くしてね」

と言いついて今度こそ階段を降りていく。

もそもそ、とイスに掛っているワイシャツをはおり制服のズボンをはくと、一階へと降りる。

洗面所で顔を洗って居間に入ると陽菜がイスに座っていた。

「冷めちゃうといけないから、早く食べてね」

テーブルの上にはきれいな焦げ目がついたトーストとベーコン、そしてスクランブルエッグが置かれていた。

「先に食べてて良かったのに、わざわざ待ってたのか」

そう言いながら陽菜の目の前に座る。

「うん、すぐに降りてくると思ったから。」

それより早く食べないと遅刻しちゃうよ?」

「そうだな、んじゃ・・・いただきます」

「はい、いただきます」

ちゃんと二人とも手を合わせてトーストを手取る。

サクツといい音をトーストが立てた。

陽菜は基本的に家事を高いレベルでこなしてくれる。

俺も自炊はするが陽菜ほど上手ではない。

今日はトーストだが、和洋中なんでも作ってくれそのどれもがうまい。

そんな事を考えながら食べていたからか、

目の前の陽菜はすでに食べ終わったらしく皿を片づけ始めていた。

慌てて残りのトーストを食べると食器を流しに持っていき、二階の自分の部屋から鞆を取ってくる。

「悪い、陽菜！遅くなった！」

玄関で待っていてくれたいた陽菜に声をかけながら靴をはく。

「ううん、大丈夫だよ」

最後に二人で振り返り、

「「行つてきます！」」

今日もいつもと変わらない一日が始まった。

第一章 出会い 1（後書き）

予定より早く書き上がりました^^

感想・指摘をして下さった、けーくん様、n a l s a s様ありがとうございます！

これからも応援よろしくおねがいます！！

今回は本小説の舞台と学園の仲間達の紹介が主になると思います。

第一章 出会い 2（前書き）

導入部分がやっと終わります！

これから戦闘シーンとか少しずつですが入れていきます！

それでは、第一章 出会い 2、どうぞ！！

第一章 出会い 2

海沿いの町、海原市。

市外から来る人と市内から出ていく人で朝と夕方の通勤ラッシュ時には

目もくらむような人混みがそこかしこで発生する人口七十万人の大都市だ。

そんな町の外れ、海とは反対側にある小高い丘に俺達が通っている私立海原学園は建っている。

広い敷地に三階建ての校舎がコの字型で並び、

白塗りの壁が海で反射する日光を受けてキラキラと輝いている。

「おっはようっ、一騎、折原さん！」

「お、おはよう、一騎くん、陽菜ちゃん」

学園に向かう途中、緩い坂道を登っていると、

脇の小道から同じクラスの寺門勇輝^{てらかとゆうき}と篠原亜泉^{しのはあみ}が出てきた。

「おはよう。亜泉ちゃん、寺門くん」

「おう、おはよう。亜泉それに勇輝」

この二人とは小学校からの付き合いで八年連続同じクラスで、
今もその記録を更新中という腐れ縁、もうここまできたら運命とか
を感じる領域だろう。

ちなみに勇輝と亜泉は俺と陽菜と同じ幼馴染だ。

そういえば自己紹介がまだだった。

俺の名前は土岐一騎。

7月28日生まれ、の十五歳で海原中学の三年生だ。

「折原さん、”また”一騎の家から登校？押し掛け女房もここまで
くると尊敬できるよ」

勇輝がニヤニヤしながら陽菜に話しかけている。

てか、勇輝。お前、また見てたのか・・・

勇輝の家は町の高い位置にあるので時々、というかしょっちゅう

いや毎日、俺と陽菜が登校するのを見ていたりする。

「え？別に幼馴染なんだから朝ご飯ぐらい作りに行くの普通でしょ
？」

陽菜はいつもの事とサラリと勇輝の発言を受け流す。

もはや朝の一習慣となっている。

でもこの態度、初めて同じ事言われた時もそうだったよな。

ちょっとは頬を赤らめたりしてくれると嬉しいんだけど・・・

そう、陽菜は本当に俺を幼馴染としてしか見ていなくて、

どこかの物語のような「昔から好きでした」とかいう関係には一切
発展しそうにない。

「そんな事言っても、俺の幼馴染は来てくれないぞ?！」

勇輝が陽菜の言葉に亜泉を指差しながら少々ヒステリックに叫ぶ。

「あ、あの・・・それは・・・その」

亜泉がしどろもどろになりながら必死に言葉を紡ごうとするが、

どうやらいきなり話を振られて緊張してしまったらしい。

もはや言葉として成立していない。

「それは寺門くんが亜泉ちゃんに優しくしてないからでしょ?」

陽菜が勇輝と亜泉の間に入って言う。

「なにおう!この、世界一女の子(美少女限定)に優しい寺門様が、
幼馴染を大切にしないはずないだろうが!!!」

・・・始まった、バカ勇輝の演説が。

「この世に男と女は1対1！なのに、大部分の女子ときたら

イケメンばかりに惑わされやがって！そもそも・・・」

こうなるともう止まらない。素直に放っておくのが一番良かったりする。

「あの態度がいけないと思うんだけど・・・そう思わない、トキ君？」

陽菜が苦笑しながら俺に聞く。

「まあ、あのバカ勇輝のあれは今に始まった事じゃないし」

俺も苦笑しながら後ろで何かを語っている勇輝を見る。

「・・・だから俺は！って置いて行くな～～！！」

今日も平和だ。澄み渡る青い空を見ながら俺はそう思った。

教室に入りクラスの人々と昨日見たテレビ番組の話などで盛り上がる。

キーンコーンカーンコーン

「ほら、お前ら、予鈴は鳴ったぞ。さっさと席に着け！」

予鈴のチャームと同時に教室に入ってきたのは担任の徳永先生だ。

長身の男性で運動部の顧問をしているせいかこげ茶色に肌を焼いている。

黒ぶちの眼鏡がチャームポイントで大雑把な性格ながらも親しみやすく、生徒からの人気も熱い。

生徒の間では徳さん《とくさん》とか徳くん《とっくん》などの愛称で呼ばれている。

「今日も全員揃ってるな？いない奴は手をあげる」

「先生！それ、古いです！」

先生のボケに心得たとばかりにクラスメイトの誰かがツツコミを入れる。

笑いが教室に広がる。

「そうか？それなら今度はもっと面白い事を考えてこよう」

再び笑いの波が教室に広がった。

「よし！今日もみんな元気だな！それじゃあ、今日も一日しっかり勉強するよつに」

徳永先生の言葉で学校での一日が動き出した。

第一章 出会い 2（後書き）

作：次回から、やっとつと物語本編開始だ〜

ということで、今日はこの物語の主人公、土岐一騎君に来てもらいました！

一：どうも、土岐一騎です。

作：一騎は一回マーボー様の感想で出てきてもらったな〜

一：そうだな、あの後お前と死闘を繰り広げたけどな

作：まあ、和解に至ったからいいじゃん。気になる方は、マーボー様の所へGO！

それはそうと一騎、やっと物語本編だよ？

一：そうだな

作：反応が薄いな〜、なにか無いの？

一：・・・作者が暴走しない事を祈るよ

作：ひどいな〜（視線を横に）

一：・・・おい、俺の目を見て話せ

作：だから暴走なんてしないって（やっぱり視線を横に）

一：作者ああああ！！！！

作：一騎がバーサークしてきたので今回はここまで！

最後になりましたが感想を下さった、マーボー様、けーくん様、n
alsas様

ありがとうございます！これからの「魔法戦記ウィザリア」が本
当の始まりです、これからもよろしく願いします！それでは！！

ー：作者アアアア！！

第一章 出会い 3（前書き）

初の戦闘シーン……！

物語が動き出す第一章 出会い 3、どうぞ……！

第一章 出会い 3

「私、今日は用事があるから先に帰ってくれない？」

放課後、授業が終わるとすぐに陽菜は俺の席に来てそう言うど何処かに行ってしまった。

仕方なく勇輝と亜泉を誘おうと教室内に二人の姿を探すがいない。

「……そういえばあいつら、今日は部活と委員会だったな」

勇輝はサッカー部の練習でグラウンドに、

亜泉は図書委員会の会議で図書館に行っているのだろう。

ちなみに俺は今年で帰宅部三年目で委員会にも入っていない。

特に理由は無いがなんとなく入る気がしなかったからだ。

人の少なくなった教室を後にして部活に向かう生徒達とすれ違いながら学校から帰路につく。

途中で今日が読んでいる漫画の発売日だと気づいて駅の近くにあるショッピングモールに向かう。

「やべーやつぱ、なのはも僕力ノも面白いな」

目的の物を手に入れられた俺は満足顔でショッピングモールから出ようとした、その時

ドクンッ！！

胸の内が何かを感じ取ったように大きく脈動した。

「ッ！！なんだ？」

ドクンッ！！

もう一度、胸の内が大きく脈動する。

「ほんとに何なんだ？」

首を傾げながらも家へ帰ろうとショッピングモールから出る。

そこで一つ、俺は違和感を覚えた。

なんか・・・静かすぎないか？

この時間帯、夕焼けが見え始める午後五時は帰宅ラッシュで、町が一番混雑する時間の一つだ。

それにしてもいくらなんでも静かすぎる。

物音一つしない。

周りを見回しても駅前だというのに人一人いない。

……いや、いた。

駅前の広場、いつもなら人々が憩う場所に、一人の少女と一匹の化け物が対峙していた。

「なんなんだ、あれ？コスプレ……とかじゃないよな」

それにしては少女の纏う雰囲気というものがトゲトゲすぎる。

対峙している黒い化け物も明らかにコスプレとかいうレベルじゃない。

少女の右手が動く。

そこに握られていたのは白い美しい剣だった。

夕焼けを受けた剣が放つ輝きは、明らかに本物の輝きだった。

「おいおいおい……これ、なんかやばいんじゃないのか？」

尋常じゃない気迫が少女から放たれる。次の瞬間、

「ハアアアアアッ！！」

裂ぱくの気合いを口にしながら少女が化け物に斬りかかっていた。

白い軌跡を描きながら少女の持つ剣が振り下ろされる。

ガシンッ！

しかしそれは、化け物が掲げた右爪で金属的な音を響かせながら受け止められた。

そのまま化け物は剣を掴み、反対の爪で少女を切り裂きに掛る。

驚いた事に少女はそれを、掴まれたままの剣を軸に逆上がりの要領で避け、

さらに化け物の頭に強烈な蹴りをいれて化け物の拘束を抜け出すと再び距離をとって対峙する。

明らかに現実離れた光景に思わず少年は後ずさってしまふ。

カツッ

後ずさった足が小石を蹴飛ばす。

普段なら誰も気付かないような小さな物音、

しかし普段とは遠くかけ離れたこの異質な空間でそれは

致命的な物音となった。

音に気付いた化け物が俺の方を向く。

つられて少女の瞳も俺の姿を映し出した。

「えッ！なんで現地住民がこの空間に！？」

少女の驚きの声、その声と同時に化け物が咆哮をあげ、俺に向かって突進してきた。

それは決して目で追い切れない程早いというものではないが突然の事に

俺の足はすくんで動こうとはしない。

化け物が牙を剥きだして俺を噛み砕こうと迫ってくる。

「うわわわわああー！！」

俺は恐怖で目をつむることで、自分を噛み砕くだろう牙から逃避する。

化け物の牙は更に近づき、一騎に今、まさに噛みつきうとした、

そこへ・・・

『 protection! 』

男の声が辺りに響く、次いでガツンッ!という重い物音。
俺が恐る恐る目を開くと目の前で紅い魔法陣が回っていた。

第一章 出会い 3（後書き）

作：やっとファンタジー小説らしくなってきた！

一：そうだな。いきなり俺はピンチだったけどな！！

作：いやね、これはこれで物語の始まりとしては妥当でないかと・
・（汗）

一：作者アアアア！！！！

作：うわゝゝ！！やっぱりこの展開！？しかし！俺は学習するのだ
よ（ニヤリ）

一：なんだと？！

作：さあ来い！！俺の救世主、折原陽菜！

陽：こんにちは、トキ君の幼馴染の折原陽菜です

一：ひ、陽菜？！

陽：もう、トキ君ったら作者さんを困らせたらだめだよ？

一：い、いや・・・だってな？コイツがな？

陽：作者さんの事をコイツだなんて言っちゃいけないよ？

一：ま、待て陽菜。俺の話を聞いて・・・

陽：返事は？

—：………

陽：お返事は？トキ君？

—：……はい、分かりました

作：勝利！！（ガッツポーズ）

—：くそ！今回は陽菜に免じて勝ちを譲ってやる！

陽：こら！トキ君！！

—：……スイマセン

作：さて、横でなにやら夫婦漫才をしていますがお礼に移らせて頂きます。

感想を下さった、けーくん様、n a l s a s様ありがとうございます！！
す！！

次回、第一章 出会い 4 もよろしく願いします！！

—：あ！作者てめえ、勝手に終わらせるな！！

陽：トキ君！！

作：では！また次回におめにかかれる事を祈って

陽：次回もよろしくおねがいします♪

— …あ、ええつと …… 次回の俺の活躍に期待して下さい!!!!

第二章 覚醒 1（前書き）

やっと第二章!!

どうぞ!!

第二章 覚醒 1

俺が目を開くとまず映ったのは眩しいまでの紅。

テレビとかでよく見る幾何学模様で彩られた魔法陣が目の前を回っていた。

「大丈夫?!」

その声と同時に視界に流れ込んできたのは美しい金色に時折混じる紅の髪。

先ほどまで化け物と戦っていた少女だった。

少女の持つ剣の柄にある紅の宝石が明るく輝いている。

それを見て俺は、少女が俺を助けてくれた事実気付いた。

「ねえ！ホントに大丈夫?!」

突然の事に呆けていた俺は再度かけられた少女の声で正気に戻る。

「あ、ああ。……大丈夫だ」

俺が返事を返した事で安心したのか少女は軽く溜息をつく。

「そう。無事ならよかった。」

そう言うと改めて紅の魔法陣の向こうにいる化け物に向き直る。

「な、なあ。これは何かのイベントなのか？」

俺は一類の希望を抱きながら少女に聞くが返ってきたのは無情なまでの現実だった。

「これが現実じゃないと、本当にあなたはそう思ってるの？」

その声に続いてピシリ、という嫌な音が聞こえる。

音の発生源は目の前、

今まで俺達を護っていてくれた紅い魔法陣からだった。

「……ホントに無茶苦茶だわ、コイツ」

少女の顔が真剣なそれへと変わり、最初に少女を見た時と同じ、物凄い気迫が湧き出した。

「お、おい……これってなんかヤバいんじゃないか?！」

「黙ってて！死にたくなかったら早く逃げなさい!!」

俺の叫びに少女は化け物から目を離さずに叫び返す。

俺は逃げようとするが意識だけが空回り、身体が動かない。

魔法陣の亀裂は徐々に広がっていく。

「早く!……もう、持たない」

そして、

・・・・・・・・・・・・・・・・・・パリンッ！！

儚い音を立てて魔法陣が砕け散った。

グオオオオオオオオオツッ！！

『prot・・・』

「キヤアアアアアッ！」

魔法陣を破った勢いのまま化け物は少女に体当たりを浴びせる。

少女と化け物がぶつかる寸前、紅い宝石が再び輝き始めて男の声が聞こえたが、

あの魔法陣を発動させるのには化け物との距離が近すぎた。

少女の身体が大きな孤を描いて吹っ飛ぶ。

ドガンッ！！

吹っ飛んだそのままの勢いでショッピングモールの外壁にぶち当たる。

少女の身体に力が入っていない。

四肢はだらりと垂れ下がり、白い剣はあらぬ方向に突き刺さっている。

そして、少女の額から一筋の赤が流れ落ちる。

ドクンッ！

それを見た瞬間、俺の脳裏にある光景が蘇った。

目の前で血を流しながら倒れる両親

狂い叫び、両親を殺した刃物を持つ男の姿

そして・・・ベッドの下に隠れている俺の所に流れ着く血の流れ

ドクンッ！

気がつくと身体が勝手に動いていた。

さっきまで動かなかったのが嘘のように動き出す。

グオオオオオオツ！！

化け物が少女に止めをさそうと再度、体当たりの構えをとる。

その目前、少女を庇う位置に、俺は立っていた。

無茶なのは分かっている。

無謀なことも分かっている。

俺じゃどうしようも無いことも、俺じゃなにも出来ないかもしれないかもしれない事も

そんな事は痛いほど分かっている。

でも、

「それでも・・・俺は守るって決めたんだ。俺に関わる全ての人を守るって、十年前も前になあ！！」

その叫びは自分の決意の証。逃げだしそうになる心を奮い立たせて、少女を守る為に化け物と対峙する。

ドクンッ！！

力が欲しい、あの時もそう思った。自分の大切なものを守れる力が欲しい。

この少女だってそうだ、意味の分からない化け物から俺を守ってくれた。

理由なんて後付けだ。俺が守りたいものを守る。

だから、

「俺はッ！！」

化け物が走り出す。

でも、俺は逃げ出さない。

ドクンッ！！

胸が熱い、俺を励ますように胸に熱いものが渦巻く。

化け物がすぐ目の前まで近づいてくる。

「力が欲しいッ！！」

ドクンッ！！！！

そして・・・

『drive in!』

ガキンッ！！！！

俺は目を見開いていた。

化け物はすぐ目の前にいる。

獐猛な牙が覗き、俺を噛み砕こうと蠢くがそれ以上こちらに來ない。

いや、來られない。

グオオオオオオオオオツッ！！！！

青い魔法陣が俺の目の前で回っていた。

第二章 覚醒 1（後書き）

今回は精魂着き果てました・・・

感想を下さった、マーボー様、けーくん様ありがとうございました！
短いですが次回もよろしく願いします！！！！

第二章 覚醒 2（前書き）

テンション上がってキタ~~~~!!
なんかいきなりクライマックスな進みになってきているけど
気にしない!!

第二章 覚醒 2、どうぞ!!

第二章 覚醒 2

青い輝きが広がっている。

その輝きは化け物の進行を阻みながら俺を包み込む。

頭に響く女性の声。

次の瞬間、俺の視界は眩い輝きに埋め尽くされた。

何処とも知れない場所にいる。

そこは一面が蒼水晶のようなもので出来ていて、俺の姿を映し出している。

「ここは……どこだ？」

さっきまで少女を守ろうと化け物の前に俺は居たはずだ。

それが、なぜ？

「ああ、そうか。俺、死んじゃったんだな……」

悔いはない。自分の信念を貫き通したのだから……

『……なにをバカな事を考えているんですか？』

唐突に紡ぎだされる女性の声。

それはさつき頭のなかに響いてきた声と同じだった。

「え？・・・うわッ！！」

声のした方向を見ると全身を蒼い鎧で固め、手に刃が蒼氷で出来た鎌を持った女性が居た。

「えっと・・・死神さん？」

『違います！！』

力強い否定。

「いや、でも・・・俺って死んだんですね？」

『だから・・・さつきから言ってるじゃないですか、何をバカな事を考えているのですか？一騎』

名前を呼ばれて驚く。

そりゃそうだろう、見ず知らずのしかも女性に名前を呼ばれりゃ誰でも驚くさ。

「なんで・・・俺の」

『「なんで俺の名前を知っている」・・・とかベタはセリフは要りませんからね』

「・・・・・・・・・・」

言おうとした事を先に言われて口をつぐむ。

『落ち着きましたか？』

女性が聞いてくる。

そういえば、女性の話を聞く事が出来るぐらいには落ち着いていた。

『それではまず、一騎の質問に答えましょうか』

「質問？」

『・・・・・・・・・・』

「うそうそ！俺は死んだのかそうじゃないかって話ですよね!？」

落ち着きすぎていらぬボケをしてしまった・・・目の前の女性の視線が痛い・・・

『時間が無いので手短く話します。まず、あなたは死んではいません』

「あれ？俺って死んでないんだ」

『はい。簡単に言うと、この私の空間に一騎の意識を移したという事です』

「そ、そうなんだ……」

要するに、テレポート？

『微妙に違いますが、その認識で概ね合っています』

俺の思考が読まれた？！

『その説明はまたいつか。今はこれからあなたに必要な事を話します』

そう言う女性も持っていた鎌を一閃する。

すると空間が切り裂かれ！丸いレンズの様なものが出来る。

そこには俺の目の前で蒼い魔法陣に阻まれている化け物がいた。

『今、あちらの時間はここでの時間の流れと違うので止まっているように見えますが、
実際は少しずつ動いています』

あ、ホントだ。

化け物が少しだけ動いてる。

『自己紹介をしましょうか、私はイリス。魔法晶石と呼ばれる物です。』

そして……あの化け物は七つに分裂してしまった私の分身です』

「俺は土岐一騎……って！え？！今の、あの化け物はあなたの分身だって……」

『本当です。それからイリスでいいですよ』

「そ、そうか？なら、イリス今のってどういう？」

『これも話すと少し長くなるので今は。ここから本題です』

「お、おう」

話の流れに微妙に着いていけなくなっている気がする……

『さつき、私の分身を前にしてあなたは何も力を持たないのに立ちはだかりましたね。なぜですか？』

「なぜって？」

『あの体当たりにあたれば、あなたは間違いなく死んでいたでしょう』

「……だろうな」

『それなのに……』

「そんなの簡単な事だ。俺が守りたいから守ろうとした、それだけだ」

俺は短く言う。しかしこれが俺の本心だ。

自分に関わる全ての人を守りたい。

ただのエゴだがこれだけは変えようのない、俺自身だ。

『・・・・・・・・・・』

イリスは黙っている。しかしその目は俺から離されていない。

だから俺もイリスの目を見て言う。

「おかしいか？」

『・・・・・・・・いえ、あなたがそうでなければ私が答えられるはずがありませんから』

「答える？」

『私達魔法晶石は魔力を蓄える性質があり、俗に「人の願いを叶える石」と呼ばれています』

そこでいったんイリスは言葉をきる。

『しかし、私たちが答えられるのは強い願いや願望、意思だけなのです。

それめかなり大きくてしつかりとした』

『・・・・・・・・・・』

『一騎はさつき、「力が欲しい」と願いましたよね？』

「ああ、俺に関わる全ての人を守る力が欲しいって願った」

『その願いは、私が答えるのには十分。いいえ、それ以上の強さがありました。だから、』

「だから？」

『私は一騎の願いを叶えます』

「いや、俺は自分の……」

『分かっています。一騎は本当に自分の力だけで自分の周りにいる人々を守ろうとしている。』

だから、これは交換条件です。』

「交換条件？」

『私は一騎に関わる全ての人を守る力を与えます。』

そして一騎は私の分身達を、欠片を探し集めてもらいたいのです』

「そ、それは……」

『私達は扱い方を間違えると大変な事になってしまうのです。』

今はあの少女が結界を張って私の分身を外に逃がさないようにしてくれています、もう持たないでしょう。

そうならば一騎の大切な人も傷ついてしまつかもしれません。だから、これは交換条件です』

確かに、俺は自分の力だけで俺の大切な人達を守りたい。

でも、俺の力はあの化け物、イリスの分身の前ではあまりにも無力だった。

これからもこんな事が続けばいつか勇輝や亜泉、折原のおじさんとおばさん

それに・・・陽菜だって傷つくかもしれない。

そんな事は許せない。絶対にだ。俺はもうあの、全てを失う感覚を味わいたくない。

「分かった。力を貸してくれ、イリス」

俺は決意する。戦う事を。力を手に入れる事を。

『分かりました。それでは』

イリスが俺に近づいてくる。その身体が青い輝きに包まれ始める。

「そういえば、どうやって俺に力をくれるんだ？」

その方法を俺はまだ聞いていない。

『大丈夫です。さあ、目を瞑って』

言われるままに目を瞑る。

『我、イリスは汝、土岐一騎を私の契約者と認め、汝の願いを聞き届けよう』

耳元で聞こえるイリスの声。

そして、俺の胸に熱い本流が流れ込んできた。

『私を受け入れて下さい。一騎がするのはそれだけでいいんです』
言われた通りに受け入れる。その感覚の中、俺はこの空間に来る前、胸が熱くなった事を思い出した。

あれは、イリスが俺の願いに答えようとする前兆だったのだろう。

蒼水晶の空間が壊れ始める。それと同時に意識にもやががかってくる。

夢の中みたいだ、そう思った瞬間。俺の意識は暗転した。

グオオオオオオオオオオツツ！！

「・・・・・・・・・はっ！！」

化け物、イリスの分身の雄たけびで俺は覚醒した。

俺の胸にはいつのまにか蒼水晶で出来た宝石が下がっていた。

『一騎、あなたの力を解放するキーワードを教えます』

そこからイリスの声が流れる。

「おう！いつでも来い！」

そして告げられる言葉。

「これを言えば俺はイリスの分身に勝てるんだな？」

『はい』

イリスが力強くうなづく。

『一騎が力を解放すると同時に障壁を解除します。タイミングをあわせますよ！』

「おう！」

そして俺の戦いの歴史が幕を開け始める。

『いきます！・・・・・・・・3、2、1！』

「drive！！」

俺の身体が再度、青い輝きに包まれた。

第二章 覚醒 2（後書き）

だめだ、眠い・・・
次回もお楽しみに z z z z

第二章 覚醒 3（前書き）

さて！物語がようやく進みだして一騎が楽しい事になっています
一騎の決意やいかに！？

第二章 覚醒 3、どうぞー！

第二章 覚醒 3

『setup!!』

広がった青い輝きは俺の身体に収束していく。

『バリアジャケット構成……完了、
武装構築……完了、契約者とのリンク異常なし』

制服がポリゴンのようになり、白いズボン、シャツへと組み替わる。

手には剣の根元に蒼水晶が嵌め込まれた白い剣が現れる。

「なんか、あの娘の武器に似てるな」

『一騎の記憶から構成してるのでイメージの強いこの形を選びました』

「そっか」

青い輝きが完全に収束し、俺の視界が戻ってくる。

それと同時に目の前の魔法陣も消滅した。

グオオオオオオツ!!

体当たりをいなされたイリスの分身は今度は爪を振るってくる。

さっきまでの俺だったら簡単に引き裂かれていただろう。

でも今は、

「ハアアアッ！」

ガキンッ！！

俺の振るった剣が分身の爪を止める。

「イリス！コイツ、どうすればいい？！」

『分身は倒してしまえば後は私に取り込みます！

だから、一騎は私の分身を倒す事だけを考えて下さい！』

「分かりやすくていいな！」

剣に更に力を込めて分身の爪を押し返す。

それからは分身に攻撃する合間を与えないように剣を振るい続ける。

「ハアッ！セイッ！ヤッ！」

戦い方は直接頭に流れ込んでくる。

今まで本当の戦いをした事がない俺でも普通に戦う事が出来る！

グウオオオ！オオオオオオッ！

分身が少しずつ後退する。身体のおちこちから黒い霧が漏れ出し、

分身が弱っている事を俺に教える。

これなら、いける！

『あともう少しです！気を抜かないで！』

「分かつてる！」

あくまで相手に攻撃の機会を与えずに剣を振るう。

と、突然分身が俺から大きく距離を取った。

「なんだ？」

『一騎！あの娘です！』

分身に斬りかかる事だけを考えていたせいで少女の事がおろそかになっていた。

この場で今、一番弱い相手、つまりあの少女を分身は狙っている！

「でもどうやって？」

分身から少女まではかなりの距離がある。分身の牙も爪も絶対に届かない距離だ。

そんな俺の疑問に答えるように分身の前に赤い魔法陣が現れる。

『ッ！！一騎！』

イリスの思考が頭に流れ込む。

「しまっ……」

グワオオオオオ

分身が展開した魔法陣から赤い光が放たれる。

それは少女に容赦無く襲いかかった。

「……なめてんじゃ、ないわよ!!」

必殺の光を止めたのは一騎でもイリスでもなかった。

「これぐらいで……私がやられると思うな!」

あの少女だった。俺を守ってくれた紅の少女。

「イフリート!」

『relocate』

少女から離れた場所にある白い剣が少女の手元に現れる。

「そのあなた!という事が後でたっぷり聞くからそのつもりで
いなさい!」

後ろから叫ぶ少女。

「……元気だな、あの娘」

『そうですね・・・ついさっきまで気絶していたとは思えませんね』

オオオオオ！！

攻撃を防がれ分身が唸り声をあげて、逃げようとする。

『restrictbind』

そこへ響く男の声。分身が紅い魔法輪で拘束されていた。

「早く倒して！」

少女の声。

「分かつてる！」

俺はすでに分身へと走り出していた。

分身は拘束から逃れようと必死に抵抗するが少女はそれを許さないように更に拘束が強まっている。

「ハアアアアアアアツツ！！」

剣を大きく振りかぶり、そこに体重を乗せた一撃を分身に浴びせる。

グワアアアアツ！！

それは分身にとって止めの一撃になったようで、断末魔の声をあげながらその身体を霧散させる。

後に残ったのはイリスと同じ、蒼水晶の宝石だった。

『collect』

イリスの声に目の前に浮かんでいた蒼水晶が俺の持つ剣の根元、イリスの本体に取りこまれる。

それと同時に身体に力が広がる感覚。

『まずは一個目、ありがとうございます、一騎』

「いや、俺も助かったよ」

その会話を区切りに着ている服が制服に戻った。

「ぬ・・・」

俺の背中に押し掛かる重い視線。

後ろを振り向くと少女が俺を睨んでいた。

『行ってあげた方がいいんじゃないでしょうか』

「ああ、そうだな」

『あっ』

「ん？どうした、イリス？」

ドサッ

『いえ・あの娘がまた気絶してしまったみたいで』

「はっ?! さっきまで元気そうにしてたのに」

『それで結界が消えそうになってしまったので咄嗟に結界を引き継いだんです』

「そう、なんだ。とりあえずお疲れ様、イリス」

『いえいえ、それはそうとこれ、どうしましょう?』

その言葉で駅前の広場を見回す。道路はあちこちで陥没し、ショッピングモールの外壁はひび割れている。

広場にあった噴水は見るも無残に崩れ落ちている。

「ああ、どうしようか?」

『こればかりは……どうしようも……』

すまなそうにイリスが言う。

「それと、こっちも」

俺は気絶している少女を見る。

少女の服装は出会ったときとは違う物になっている。

その右手にもう剣は握られていなく、代りに手首に紅い宝石のブレスレットがされていた。

「とりあえず家に運ぶか」

『それまでの結界維持は任せて下さい！』

「それじゃあ、もう一仕事頼む」

そうして俺は少女を背負うと逃げるようにその場を後にした。

一騎がイリスの分身と戦っているのと同時刻

その部屋には一人の男が居た。

いかにも研究者といった感じの白衣に身を包み、その上に紫色の長髪を垂れ流している。

男の前にはいくつものパネルが開き、その内の一枚には一騎が戦う姿が映し出されていた。

「クツクツクツ、面白い」

男が壊れた笑みを浮かべる。その瞳には狂気の色が宿っていた。

「魔法晶石、土岐一騎……実に面白い！」

コンコンッ

部屋にある扉がノックされる。

「来たか……入れ」

扉が開かれる。

「姉さんの居場所の手がかりが見つかったって本当？」

そこには一人の少女が立っていた。

金色の美しい髪に黒曜石のような漆黒の瞳。

その首には髪と同色の宝石で出来たペンダントが下がっている。

「ああそうだ。これを見る」

一騎達が映っているのとは違うパネルを少女に見せる。そのパネルには蒼水晶姿のイリスが映っていた。

「これは・・・魔法晶石？」

少女はしばらくそれを眺めると呟く。

「そうだ、これを集めて欲しい」

「でも、これがなんで姉さんの居場所の手がかりに？」

少女が疑問を口にする。

「フフフツ、それは魔法晶石の共鳴現象だ」

「共鳴現象？」

「魔法晶石は互いに影響を及ぼし合う。お前の姉は魔法晶石の契約者だろう？」

つまり、こちらにも魔法晶石があればお前の姉も見つけるのも容易くなるだろう」

「そう」

少女の瞳に強い光が宿る。

「しかし、問題が一つある」

「なに？」

「この魔法晶石は七つに分裂しまっている」

「なら探してくる。それで、その魔法晶石はどこにあるの？」

少女の問いに男がニヤリと口を歪める。

「魔法統制局の管轄外世界、地球だ。転送装置の設定は済ませてある」

少女はそれを聞くと男には目もくれずに部屋から立ち去った。

「……せいぜい私の為に働け、フェイト」

第二章 覚醒 3（後書き）

作：とうとう一騎が物語の主人公らしくなったぞ

一：そう、俺は俺に関係する人すべてを守りたい！！

作：なにやら熱くなっている一騎は放っておいて、感想をくださったけーくん様ありがとうございます！！

これからよろしく願います！！

次回は小休止！登場人物の紹介をします

断章 登場人物紹介 part 1

作：さて、今回は予告通りに登場人物の紹介をしたいと思います！

all：わ〜〜（ドンドンパチパチ）

作：さっそく紹介に移りたいと思いますが・・・一騎、ラストでいいよね？

一：なんで！？

作：いやだって、読者も野郎の紹介なんか期待してないだろ

一：俺、主人公！！

作：それでは紹介します！一騎の幼馴染の折原陽菜ちゃんです！

陽：こんにちは

一：俺は！？

作：予想通りというか結構読者の評判がよかったです！ちなみに三浦のお気に入りでもありますww

陽：ありがとうございます（照れ気味に）

作：んじゃ、陽菜のプロフィールをどうぞ！！

一：俺を無視するなあ！！

名前：折原 陽菜

役職？：一騎の幼馴染

血液型：A型

誕生日：7月7日

スリーサイズ：78・52・84

趣味：料理と掃除

ー：普通だね

作：うん、まだ陽菜の章じゃないし。引っ張れるだけ引っ張ってみようかと……

陽：……作者さん

作：？どうした、陽菜？

陽：なんで、なんでスリーサイズまで書いてるんですか？！

ー：そういえば……意外とスタイルいいn

陽：トキ君は余計な事言わないで！！（ドゴッ！）

ー：ゴフッ！！

作：え、えと・・・まずは落ち着こう、な

陽：私はすっごく落ち着いてるよ？さ・く・しゃ・さん？

作：（ガクガク）

陽：作者さんには少しお仕置きが必要みたいですね（ガシッ）

作：ま、待て！話せば分かる！！

陽：トキ君、後お願いね

ー：（コクコク）

作：あ！一騎！お前、俺を見捨てるのか？！

ー：・・・さすがに陽菜には逆らえない

作：裏切り者オオオオオ！！！！

ー：合掌・・・・・・さっきはあんな仕打ちを受けたが、生きていろよ

寺：なあ

一：ん？

寺：さつきから俺と亜泉、空気じゃないか？そつだろ？亜泉

亜：そ、そんな・・・ことは・・・ない、と思う

一：それじゃあ今度はお前たちの紹介にするか、陽菜にも頼まれた事だし

寺：おう！頼むぜ

名前：寺門 勇輝

役職？：一騎の悪友

血液型：B型

誕生日：10月15日

所属部活：サッカー部

名前：篠原 亜泉

役職？：勇輝の幼馴染

血液型：AB型

誕生日：3月3日

スリーサイズ：66・51・70

所属委員会：図書委員会

趣味：読書

亜：あ、あの

寺：どうした？亜泉？

亜：わ、わたしも・・・スリーサイズ、書かれてる・・・

一：作者のプロフィールそのまんま使ったからな

寺：ていうか、デジャヴを感じるのは俺だけか？

一：奇遇だな、俺もだ

陽：寺門くん

寺・一：（ビクーン！！）

寺：ひ、陽菜ちゃん（汗）

陽：寺門くんもそういう事しちゃうんだ

寺：や、やだな、全ての女子（美少女限定）に優しい俺が幼馴染のスリーサイズを暴露するなど……あつ

陽：寺門くん？

寺：陽菜ちゃん、笑顔が怖いよ……てか、一騎！お前も同罪だろ？！

陽：トキ君がそんな事するわけじゃない！

寺：身内囂肩だ！

陽：さあ、寺門くんも作者さんと同じ所に行きましょう？

寺：か、一騎！助ける！

一……俺には無理だ

寺：裏切り者オオオオオオオ！！

一：た、助かった

亜：か、一騎くん……あの、続き

一：続き？

亜：一騎くんの紹介・・・まだ

一：ああ、そうだったな。それじゃあどつぞ！

名前：土岐 一騎

役職？：主人公

血液型：A型

誕生日：7月28日

所属部活：帰宅部

デバイス名：イリス（虹の女神の意）

待機形態：青い水晶

武器形態：剣（近距離型）・双剣（近距離特化型）

銃（中距離型）・双銃（中距離特化型）

砲銃（中・長距離特化型）

槍（近・中距離型）・手槍（突撃特化型）

ランク：S

フロントアタッカーで全距離対応の魔導師

作：やっぱり、多いかな？一騎の武器形態の数

一：いや、俺はこれでいいけど・・・うわッ！
いつの間に戻ってきた？！

作：ん？ついさっき・・・地獄ってホントにあるんだな

一：あんまり聞きたくな話だな（・・・）

作：あまりお勧めしないよ。はい、この話はお終い！紹介進めてくれてありがとうな

一：いや、いいって

作：まあ、後の人達は次回の登場人物紹介の時だな

一：作者、まだ一人残ってる

作：そうか、アイツが居たな・・・亜泉、ちょっと向こう行ってくれるか？

亜：分かった

一：よし！もう喋っていいぞ、イリス

イ：『やつとですか。まったく忘れられたんじゃないかと思いましたよ』

作：ごめん。途中まですっかり忘れてた

一：それはそうと、どうやってイリスを紹介するんだ？見ての通りイリスは蒼水晶状態だけど……

作：一騎、お前は大事な事を忘れてる。お前はイリスから力をもらう時の事を思い出すべきだ！

一：そつか！あの時のイリスは普通の人の姿だったな

イ：『そうですよ！ちゃんと私の事も紹介して下さい！』

作：分かった分かった、ちゃんと紹介するって！えっと……これかな？あ、あったあった

どうぞ！！

名前：イリス

役職？：一騎のデバイス

血液型：？

誕生日：？

魔法晶石で一騎の「自分に関係する全ての人を守りたい」という願いを聞き届けて
一騎に魔法の力を与えた。

作：こんなもんでどう？

イ：『まあ、それでいいでしょう』

作：なんか長くなっちゃったな、続きは後書きで！！

断章 登場人物紹介 part 1（後書き）

さて、登場人物の紹介も無事に済みました！

まだこのキャラのこういう事を知りたい！という方が居ましたら感想の一言に書き込んで下さい、喜んで解答させていただきます。

それと、読んでくださっている読者の方へ

感想を頂けると三浦もモチベーションが上がりますのでよろしくお願ひします。

ちゃんとした意見には答えていきます！

（誹謗・中傷には神の裁きを）

最後になりました感想を書いて下さった、けーくん様ありがとうございます！！

次回もお楽しみに！！

第三章 もう一人の探索者 1（前書き）

前回、意味深な終わり方をしてしまったせいかちよつと勘違いしている人がいるみたいですので、ここでちよつと説明します。

前回最後に出したフェイトは、なのはに出てくるフェイトではありません！

（設定は結構持ってきている所はありますが・・・）

今回出てくる新キャラもそんな感じなので、質問がありましたら感想の一言に書いて下さい！

では、第三章 もう一人の探索者 1どうぞ！！

第三章 もう一人の探索者 1

風が吹き荒れるビルの上、夜の闇に紛れるように彼女はそこに居た。全身を被うほどの大きな黒いマントに二つに纏められた長い金髪が風にあおられて流れる。

「七つに砕かれた魔法晶石、それを見つければお姉ちゃんのいる所も・・・ヘカート」

少女が胸元の黄色い宝石へと声をかける。

『A r e a S e a r c h・・・H i t、ここより東、二十？に反応あり』

ヘカートと呼ばれた黄色い宝石はしばらく点滅していると明るく光り出し、女性の声がそこからながれた。

「そう、じゃあ行こうか。・・・行ってきます、お姉ちゃん」

少女はビルから飛び降りる。

しかし、そのまま落ちていくことなく、黄色い輝きに身を包むとヘカートが答えた方向へと夜空を飛んで行った。

「家に帰ってくるなりこっちに呼んでゴメンな、陽菜」

「うっん、気にしないでトキ君」

あの後、少女を家に運んだほうがいいがどうしたらいいか分からない。

そこでちょうど帰宅していた陽菜を呼んできたのだ。

陽菜は着替える暇がなかったのか制服のままだったがすぐに来てくれて、

少女を見ても何も言わずに面倒を見てくれた。

少女を客室のベットに寝かせて濡れタオルを額にのせている。

まったく、ホントに出来た幼馴染だよ。

「それで？この娘はどうしたの？それに見慣れないペンダントしてるけど……」

陽菜が俺を質問攻めにしてくる。

「ま、待て陽菜。そんな一気に聞かれても答えられない」

前言撤回、陽菜もやっぱり普通の女の子だった。

『一騎も大変ですね』

（人ごとだと思って・・・）

『でも、私に出来る事は無いですし・・・』

（確かに、今イリスが喋り出しても余計にややこしくなるしな）

ちなみに今、俺とイリスは『念話』というもので話している。

これは思い浮かべた言葉でお互いに話をするというものだ。

通常なら魔力を使わなくちゃいけないらしいのだが、

俺とイリスは深い所で繋がっているから魔力を使わなくていいらしい。

「トキ君？ちょっと聞いてるの？」

「え？あ、ああ。聞いてるよ」

「もう、突然ボーっとしちゃって」

「ゴメン、ゴメン」

「ん、んん・・・」

ベットの横で陽菜と言い合っていると寝ていた少女から声が漏れる。

「ん、あ・・・ここは？」

「俺の家だ・・・傷は平気か？」

「え？あ、だいじょう・・・ッ！」

「無理しないで、体中傷だらけなんだから」

陽菜が起き上がろうとする少女をベットへと抑え込む。

「ありがとう。あなたは？」

「私？私は折原陽菜、よろしくね」

陽菜は優しい笑みを浮かべながら少女に名乗った。

「私は、カレン・マリアージュ」

少女、カレンも名乗る。

そしてカレンの視線が俺をとらえる。

「あ、あなた！さっきのk・・・」

「待った」

カレンがさっきの事を喋り出しそうになったので慌てて止める。

さすがに陽菜のいる所であの話は出来ない。

「カレン、だっけか？俺は土岐一騎だ。その事はまた後でゆっくり話してやる」

「トキ君？さっきの事って？」

「・・・そうだよな、目の前でこんな事言われたら誰でも気になるよな」

「ごめん、陽菜。今は・・・言えない」

陽菜に向かって頭を下げながら俺は言う。

「・・・それはトキ君にとって大事な事なの？」

真剣な表情で陽菜が聞いてくる。

誤魔化しは許さないといった表情だ。

だから俺も真剣に陽菜の問いに答える。

「そうだ。俺にとって大事なことだ」

そう言った俺の顔を陽菜はしばらく見ると「ふう」と、突然息を吐いて力を抜いた。

「こうなったらトキ君は頑固だもんね。分かった、何も聞かないよ」

「ありがとう陽菜、すまない」

俺はもう一度陽菜に頭を下げる。

「でも！・・・危ないのは駄目だからね？」

「分かってる。陽菜に余計な心配は掛けないようにする」

「そう。じゃあ私が出来た事があったら言ってね」

陽菜はそう言つと「水を替えてくる」と言つて部屋から出て行つた。

ホント、俺には勿体ないぐらいに出来たやつだよ、俺の幼馴染は・・

『いい彼女ですね、一騎』

（彼女じゃないよ、ただの幼馴染だよ）

『またまた、そんな事言つて』

（いや、これが本当なんだよね）

「ちょっと！私を置いてデバイスと喋りふけてないでよ！」

イリスと『念話』で話していたらカレンが話に入ってくる。

「さっき私言つたわよね？色々と聞かせてもらつて」

『そつえばそんな事も言つてましたね』

イリスが同意する。

「そうだけど、陽菜が居なくなつてからな」

「何でよ」

「何でって、そりゃ陽菜が魔法とかを知らないからに決まってるじゃないか。」

「だからさつきも止めたんだぞ？」

コイツ、そんな事も分らないのか？

「陽菜ってさつきの娘の事？っていうか魔法を・・・知らない？うそでしょ？！」

「じゃあ、魔法統制局の事も知らないの？」

「どうやら常識の認識に差異があったようだ。」

「そうだよ。その魔法統制局とやらが何かは分からないけど、この世界には魔法は存在しない」

カレンはしばし呆然としていたようだが何とか俺の言った事を理解してくれたようだ。

「・・・分かった。確かに何も知らない人を巻き込むのは私もしたくない。」

陽菜って娘が居なくなったらじっくり話を聞かせてもらっわ」

そこで会話は終わる。ちょうどそれを見計らったように陽菜が部屋に入ってきた。

「トキ君、今日は私こっちに居ようか？」

（分かってるわよね？）

「うわっ！」

いきなりカレンが『念話』で話しかけてくる。

「どうしたの？ トキ君？」

「い、いや。なんでもない」

「??？」

冷や汗を流しながら陽菜を誤魔化す。

（いきなり話しかけてくるな！！）

（だって陽菜に知られるわけにはいかないもの。だったら『念話』が一番じゃない）

てか、陽菜の事、早速呼び捨てかよ・・・

（いきなりはびっくりするだろ?!）

（分かったから、ほら陽菜が返事を待ってるわよ？）

「あの、トキ君？ なんでさっきからカレンさんの顔ばかり見てるのかな？」

あの・・・陽菜さん？・・・笑顔が怖いです・・・

「トキ君？」

「なんでもない、なんでもないです・・・。こっちはカレンも起き

たし大丈夫だと思う、
それより時間平気か？」

陽菜が来てくれるから随分時間がたっているはずだ。

部屋にある時計を見ると案の定9時を過ぎていた。

ちなみに陽菜の両親はとっても娘ラブだ。

あんまり陽菜が帰るのが遅くなると本気で泣きながら電話をしてくる。

「あ、ホントだ。じゃあ、何かあったら遠慮しないで呼んでね」

そこらへんは陽菜も心得ているのかすぐに帰る準備を始める。

といっても、身一つで来てくれたから荷物らしき荷物は無いのだが・
・・・

「分かった。今日はありがと、陽菜。おやすみ」

「いえいえ、幼馴染の頼みだもん。気にしないで、それじゃ、おやすみなさい」

陽菜はそう言うのと部屋を出て家へ帰っていった。

「んじゃカレン、俺達の事を話そ・・・・・・・・寝てるし」

「すう・・・・・・・・すう、すう・・・・・・・・」

陽菜も帰った事だしカレンに事情の説明をしようとすると、

カレンはベットで気持ちよさそうに眠っていた。

「またかよ」

『疲れていたんでしょう。私達が出会う前から戦っていたようですから』

「そんなもんか、だったら俺も風呂入って寝るよ」

こうして俺の一日は終わった。

しかしそれは、これからの戦いの日々を前にした最後の日常となった。

「ハア、ハア、ハア……これで！」

『plasmancer』

ヘカートの声と共に発生した幾つもの雷の槍が相手に向かって飛んでいく。

今、わたしの前には一体の晶石獣がいる。姉さんの手がかりとなる魔法晶石の一部。

それが単体で発動した時の姿。漆黒の獣。

ヘカートがこの晶石獣を見つけてからすぐにそこに向かった私はそれからずっと戦っている。

防御は硬く一撃、一撃が重かったがそれでも着実にダメージを与えていき今、止めの一撃を放った。

グオオオオオオツ！！

はたして晶石獣は断末魔の叫び声をあげながらその体を霧散させた。後に残るのは、蒼水晶の宝石だけだった。

『collect』

「まずは一つ目、お疲れ様ヘカート」

『マスターこそ、お疲れ様です。……それより、怪我の方は大丈夫

夫ですか？」

ヘカートが心配そうに点滅する。

さっきの晶石獣の攻撃を避けそなたで左足を少し痛めてしまった。

「大丈夫だよ、ヘカート。少し休めばすぐに良くなる」

『そう言つて、休む気なんかなくせに……』

ばれたか……仕方ない、ヘカートとの付き合いは長いのだから。

私の考えなんてお見通しなんだろうな。

「そう……だね。せつかく姉さんの手がかりが分かったんだもん。早く集めて姉さんに会いたいよ」

『そうは言つてもマスターが無茶して、もしもの事があつたら元も子も無いんですからね？』

無理をしようものなら私はあなたを強制的にバインドしますからね
『！』

本当はデバイスだけでバインドは出来ないのだが、それだけにヘカーートの必死さが伝わってくる。

本当に私思いの良いデバイスだ。相棒

「分かったよ。少しだけの間だからね？少し休んだらすぐに欠片を探すからね？」

『分かってます』

へカートの返事に苦笑しながら私はこちらの世界の家へと帰った。

・・・もう少し待っていてください、すぐに会いに行きます・・・
・・・アリシア姉さん

第三章 もう一人の探索者 1（後書き）

作：あらかた登場人物は出てきたかな

カ：ちよつと！私の出番が少ないじゃない！！

作：今回は初登場のカレン・マリアージュさんに来てもらいました！
って言うか、仕方ないじゃん！

カ：どういう事よ！

作：陽菜や一騎がまだ着いて行けてないんだから・・・

カ：まったく、魔法統制局の事も知らないなんて

作：大丈夫、大丈夫。魔法晶石編ではカレンともう一人がメインになるから、

出番は増えてくるよ！

カ：そ、そう！ならいいわ！

作：（扱いやすい・・・）

カ：何か言った？

作：ッ！いえ、なにも。さて、感想コーナーに行こうか、カレンよろしく！

カ：感想をくださった、けーくん様、夜神様ありがとうございます

！！

作：いつもありがとうございます！！

これからもよろしく願います！

カ：次回は私の出番を増やさない！

作：分かったから・・・では、次回もお楽しみに！

第三章 もう一人の探索者 2（前書き）

今回は、カレンがなぜ一騎のいる世界に來たかの説明部分です！
最後にお知らせがあるのでそちらも読んで下さい！
では、第三章 もう一人の探索者 2どうぞ！！

第三章 もう一人の探索者 2

ドカアアアアアンツ!!

その攻撃は突然にやってきた。それと同時に船内が真っ赤に染まる

私、カレン・マリアージュはその爆音にイフリートを握りしめた。

今、私は第三統制世界「エルシエード」から新たに見つかった魔法晶石の護衛の為、搬送船内に居た。

魔法晶石はその特性故に希少度が高く、発見される事もかなり希だ。

普通なら私には就けないような任務だが、

最近各統制世界で事件が多発している為に私がこの任務に就いた。

「イフリート、状況は？」

『只今船内システムにアクセス中……どうやら船が何者かに攻撃を受けたようです』

「何者かって？」

『対象は不明、私のセンサーにも反応は有りません。対象は境界空間外から攻撃しているようです』

「そっか、じゃあ私の出番もあるだろうね。イフリート、drive」

『driving ignition・・・setup!』

イフリートの声と共に私の体が紅の輝きに包まれる。

統制局の制服がポリゴン状に分解されそれがバリアジャケットが構成される。

紅の宝石、イフリートの周りで白い光が集まり、一本の美しい剣が形成され、

イフリートが柄の部分に収まる。

紅の輝きが収まるとそこにはイフリートの武器形態、白い剣を携え、赤と白を基調としたバリアジャケット姿の私がいた。

「イフリート、いくわよ!」

『yes, my master』

そう言うとは私は通路へと飛び出した。

『船内に転送反応、生命反応が確認出来ないので魔法人形かと思われます。数は3、増援の可能性有り』

早速イフリートが状況を伝えてくる。

「場所は!？」

『最短距離で誘導します。まずその通路を右に』

イフリートに言われた通りに通路を駆けていく。

十中八九この襲撃者は搬送中の魔法晶石を狙っている。

一刻も早く対象を殲滅しないと魔法晶石が危ない！

『現在対象の数は5、次の通路を右に会敵まであと、3・2・1』

私は通路を右に曲がると同時に目に着いた魔法人形を白い剣、イフリートで一閃する。

「さあ、かかってきなさい。みんな纏めて相手してやるわ」

そう言いながら密集する魔法人形達へと突進する。

私に気づいた人形たちが応戦しようと動き出すが所詮は人形、動きが読みやすい。

「ハアアアッ！！」

一閃する剣に二体の人形を巻き込む。

その勢いを殺さずにその場でターン、後ろから私を狙って振り下ろされた剣を受け止める。

一瞬の拮抗、しかしそれはすぐに崩れる。

私がイフリートの腹で人形の剣を受け流しそのまま横に一閃したからだ。

これまでの間、僅かに3秒。

『新たな転送反応を確認、対象の増援4・・・来ます!』

イフリートの声と同時に床に光り出す紫の魔法陣。

「物量作戦って事ね、上等よ!こんな人形、いくらでも倒してやる
!」

再びイフリートを構えて近くにいた人形から倒していく。

どれくらい戦ったろうか、私の体感ではかれこれ一時間は戦っていると思う。

その間で倒した人形は約30体。

一体一体の力は弱い、しかし倒しても倒しても送り込まれてくる増援には少しうんざりしてきた。

「いつまで続くのよ!これ」

懲りもしないで剣を振り下ろしてくる人形達。

「効かないって・・・言ってるでしょ!」

それを弾き、切り裂く。もう何度繰り返したか分からない動作だ。

「ハア、ハア、ハア・・・」

さすがに息も切れてきた。

『ッ!!安置庫に転送反応有り!これは・・・今までの魔法人形

とは違います！

おそらく回収用の大型魔法人形だと推測します』

「こっちが本命ってわけね・・・まったく、やっと尻尾を出したわね」

すぐさま安置室に向かいたいところだが目の前には10体もの人形達が通路をふさいでいる。

「仕方ないわね・・・あんまり船を傷つけるのは気が進まないんだけど・・・イフリート！」

『explosion!』

イフリートが真紅の炎に包まれる。

「炎熱一刀！」

イフリートを持った右手を体に巻きつけ力を溜める。

「劫火・・・」

剣を振り上げ突進してくる人形達、それを私は・・・

「一閃!!」

イフリートを左から右へ思いっきり振ることで10体全てを焼き尽くす。

「イフリート、通導をお願い!!」

『yes , my master』

イフリートの誘導で安置室に急ぐ。

「・・・間に合え!」

『対象に再度転送反応! 安置されていた魔法晶石は対象に奪われた模様』

イフリートの報告に答えず目の前に見えた安置室に飛び入る。

そこでは今前の人形とは違う、蜘蛛を模した箱型をしていた。

その足元では光り始める紫の魔法陣。

「イフリート!」

『restrict bind!』

紅の拘束輪が蜘蛛型の人形を捉える。

「これで逃げられないわよ」

人形を捉えられた事と魔法晶石を奪われなかった事に安堵の息を吐く。

そして紅の魔法輪から逃れようともがく人形に近寄る。

「さあ、奪った物を返してもら・・・ッ!!」

『 protection 』

突如足掻いていた人形が動きを止め、その赤い眼からレーザーを放ってきた。

イフリートが咄嗟に展開してくれた防御魔法陣で事なきを得たが、集中が途切れたせいで人形の拘束が解けてしまう。

「しまっ・・・！！」

人形はそのまま船の外壁へと向きを返るとまた、眼からレーザーを放った。

一撃で破壊された外壁から境界空間が覗き見える。

人形はそのまま外へ飛び出す。

「逃がすか！！」

私も飛び出したいが境界空間に落ちれば世界の引力にひかれて何処に飛ばされるか分からない。

『 snakeform 』

そんな私の葛藤を見抜いたのかイフリートがその姿を変える。

剣の刃が次々と延びていき連結刃を作り出す。

「ありがとう、ハアッ！」

連結刃を振り回し逃げる人形を破壊する。

「よし！・・・あ！」

人形を破壊したはいいが奪われた魔法晶石が境界空間内に散らばり、世界の引力に引かれていく。

一瞬の思考の後、私は搬送船から飛び出す。

世界の引力に引かれる感覚、それは散らばった魔法晶石と同じ世界の引力だった。

目前には海の近くに広がる街並み。おそらくは統制外世界。

魔法晶石は流星のように町の各所に散らばっていく。

そのうちの一つ、港の倉庫群に向かう物を追いかける。

「イフリート、結界をお願い」

『isolation field』

半球状の空間が倉庫群を包み込む。

『魔法晶石の発動を確認。晶石獣を視認しました、かなりの魔力です。推定ランクはA+』

「ちょっと厳しいかもね・・・でも、やるわよ！」

『yes , my master』

そして、私は覚醒した晶石獣と相対する。

「さあ、大人しくしてもらわよ！」

イフリートを握りなおして私は、晶石獣に向かって行った。

第三章 もう一人の探索者 2（後書き）

突然ですが皆さんにアンケートを実施したいと思います。

内容ですが、前回登場させたフェイトの姉、アリシアをサブキャラから

ヒロインに昇格させるかです！

読者の皆さんの回答でこれからの一騎のハーレムメンバーが決まってきます。

奮って回答して下さいm（――）m

それでは、今回も感想を下さった夜神様、けーくん様ありがとうございました！

次回もよろしく願います！

では、三浦でした〜

第三章 もう一人の探索者 3（前書き）

更新が遅れて申し訳ない！！

インフルエンザから復活しても頭が朦朧として・・・

やっぱり体調管理は大切ですね

さて、今回ですがやっと一騎があの方と出会います！

第三章 もう一人の探索者 3、どうぞ！！

第三章 もう一人の探索者 3

教室内響く徳永先生の声。カリカリツというノートを取る音が幾重にも重なる。

なんの事は無いいつもの授業風景。

いつもなら隣で真面目にノートを取っている陽菜と同じ様に授業を受けているのだが、

今の俺の意識は別の方向に向いている。それは・・・

（ねえ、ちょっと聞いてる？）

（・・・聞いてるよ）

頭の中に響くカレンの声。そう、俺は今家にいるカレンと念話で状況の説明をしてもらっていた。

（そう？だったら説明を続けるわよ。私がここに来た経緯は話したから・・・後は、統制局についてね）

「はあ」思わずため息がもれる。これの性で今日一日は授業に集中出来ずにいる。

ノートを取る事を諦め視線を窓から見える景色へと移す。

そこからは澄み渡った青空と太陽の光を受けてキラキラと光る海が見えた。

カレンの説明はどうしたか？そんなのは聞き流してよ。

それにしても、昨日の事が嘘みたいに平和だなく、とっていると・

「土岐一騎君、「ビクッ！！」そんなに俺の授業は退屈か？」

物凄く冷たい徳永先生の声が聞こえた。冷や汗が背中を伝う。

頭の中で状況に気づいていないカレンの声が響いているがそんな声はこの非常時ではシャットアウト！

ちなみに徳永先生は怒ると地獄のトレーニングメニューを課せられる。

「すまんなく、未熟で」

「い、いえ・・・そ、そんな事はありませんよ？」

見つめ合う俺と徳永先生。

キーンコーンカーンコーン

「・・・命拾いしたな、土岐。具合が悪いなら早退しろ」

そう言って教室から出ていく徳永先生。

今はチャイムが福音に聞こえた。

「トキ君、大丈夫？今日は朝から上の空だけど・・・」

陽菜が心配そうに聞いてくる。

「いや、大丈夫だよ。でも、少し具合悪いかもしれないから先に帰るな」

勉強道具を素早くまとめて鞆に詰め込む。

「分かった。気をつけてね」

「ああ、それじゃな」

さっさと教室を出る。

「あれ？どうした、一騎？」

すると丁度教室に入ろうとしていた勇輝と会った。

「ああ、ちょい具合が悪いから早退するわ」

「ふっん、そっか気をつけてな」

そう言つと勇輝は教室に入って行った。

『さすがに疲れましたか？』

下駄箱で靴を履き替えているとイリスが念話で話しかけてくる。

（そうだね、まだ魔法つてのに慣れてないからかな。少し疲れたよ）
そのまま校門をくぐって坂を下りる。

『まあ、それについては仕方ないですよ。これから毎日私がトレーニングをしましょうか？』

（ん〜、そうだね。お願いできる？）

『任せて下さい！』

やる気に満ちた声で返事を返すイリス。

・・・藪蛇だったかな？

（・・・・つと・・・・）

ん？

（ちょっと！！いい加減返事しなさい！！）

「うわっ！！」

耳元で叫ばれたように頭の中でカレンの声が響き渡る。

（やっと気づいた・・・もう、いきなり念話が切れたから心配したのよ？）

（ごめん、ごめん・・・ちょっと慣れなくて疲れちゃったんだ）

微妙に真実と違うがまあ、これもあるのでいいだろう。

（あ、・・・ごめんなさい。気づかなくて・・・）

シユン、という音が聞こえてきそうなカレンの声。罪悪感が少し胸をよぎる。

（大丈夫だよ、それに今日は学校から早退したから残りは家で聞くとよ）

（分かったわ。待ってる）

それっきりカレンと繋がっているという感覚は無くなった。

『一騎も大変ですね』

（好きでやってる事だから・・・）

頭の中で苦笑しながら坂を下り終わる。

家までは後少しだ。と思っていると

「やめて下さい！」

少女の悲鳴に近い声が聞こえた。

「どうしたんだろ？」

『さあ？でもただならぬ雰囲気の様ですよ？』

「そっか」

自然と足が声のした方向へと向く。

『やっぱりこうなるんですね。分かっていたよ、一騎がそんな人だって契約した時から』

呆れた様な声で言ってくるイリス。

俺は苦笑しながら近くの袋小路、少女の声がした所を覗く。

そこでは、二人のチャライ男性が綺麗な金髪の少女の腕を掴んでいた。

一騎 view end

フェイト view

「やめて下さいー！」

今、私は二人の男に腕を掴まれていた。

いつもなら簡単に振り払えるのに、激しい動きをしようとするとき怪我した左足に激痛がはしる。

（setupしますか？マスター）

（ダメ、関係無い人達は巻き込めない）

（でも、このままじゃマスターが・・・）

確かに、足の痛みも我慢できなくなってきた。

ヘカートの言う通りに今日はゆっくり休むべきだった。

「ねえ、ねえ、君」

「可愛いじゃん、俺達と遊ぼうぜ」

腕を掴んで離そうとしない二人。

「もう、離して！・・・痛ッ！」

いい加減離そうしない腕を思いっきり払うと同時に左足に痛みが走る。

腕を振り払われた男達が表情を変える。

「なんだお前！せっかく声かけてやってるのにその態度」

「マジ、感じ悪い」

今度はさっきと違って肩を握りしめられる。

「い、痛い・・・」

振り払おうとしても体格の差がどうしても出てしまう。

「お前、自分が可愛いからってちょっと調子乗ってない？」

「悪い子にはお仕置きが必要だよな？」

男達がゆっくりと覆いかぶさってくる。

「や、やめて・・・」

本能的な恐怖で目をつぶりかける、その時、

「お前ら、何やってるッ！！」

一人の少年の声が袋小路に響き渡った。

フェイト view end

一騎 view

「お前ら、何やってるッ!!」

目の前では、二人のチャラ男が金髪の少女の肩を握りしめている。

少女は振り払おうとしているがどこか怪我をしているのか動きがぎこちない。

「ああ？なんだ、お前？」

「今、忙しいんですけど？子供は引ッ込んでなッ」

吐き出される悪態。「はあ」と俺は溜息をついた。

「彼女が嫌がつているのが分からないのかよ、あんたらは？」

精々お返しにと、いつもなら絶対目上に使わない言葉づかいで言い返す。

すると案の定、二人は顔を真っ赤にさせて少女を離すと俺に向かってきた。

「調子くれてんじゃねえぞ、ガキッ!」

そして放たれる拳。

つい最近までだったら当たっていたであろうそれを、わずかに体を反らすことで避けた。

イリス曰く、契約したおかげで身体能力が上がっているそうだ。

「お返しだっ!」

渾身のパンチをかわされ、態勢を崩しているチャラ男の鳩尾を思いっきり打つ。

「グボア!!」

カエルがひしゃげた様な声を出して悶絶するチャラ男。

「手前え、何しやがる!!」

片割れを攻撃されて激昂したもう一人がポケットからナイフを取り出す。

おいおい、マジかよ・・・

「オラッ!!」

付きだされるナイフ。しかしその動きはスロー再生のようにゆっくりと俺には見える。

難なくナイフを避け、ついでにとばかりにナイフを奪う。

「まだやる?」

奪ったナイフを手の中で遊ばせながらチャラ男達を見る。

「お、おぼえてるよ」

「そ、そのナイフはやる! な、投げるんじゃないぞ!!」

なんというか、前時代的な逃げ口上だよな

遊ばせていたナイフの刃を折りたたみ、制服のポケットへとしまう。

「大丈夫？」

振り向きながら聞くと少女（同い年ぐらいだろうか）はコクンと頷いた。

「そっか、良かった。どこか怪我でもしてるの？」

俺が聞くとフルフルっと首を振る少女。

「そう？ならいいんだけど・・・」

「あ、あの・・・助けてくれて、ありがとう。それじゃ」

少女はそれだけ言っと立ち去ろうとする。

しかし、その足取りには不自然さを感じさせるものがあつた。

明らかに嘘をついている。俺が声を掛けようとすると、

『本人が大丈夫って言ってるんですから、無理に聞くのはどうかと思いますよ？』

イリスが念話で言ってくる。

（そついうもんか）

少女はすでに俺の視界から消えていた。

『それより、つい先ほど新たな欠片の反応を見つけました』

（昨日に続き今日も、か）

どうもこれからは簡単に休めないらしい。

『どうしますか？』

「もちろん行くさ。場所は？」

ついさっき出会った少女の事を胸の奥にしまい込みイリスの欠片探しへと向かう俺。

しかしこれが、これから幾度とぶつかる事になるフェイト・アーウエインとの出会いだった。

第三章 もう一人の探索者 3（後書き）

やっと更新出来ました

感想を頂いた、夜神様、けーくん様、BALDR SKY様、ありがとうございます！

今回は感想コーナーだけということで、

アンケートの締め切りは2月25日を予定しています！

それでは、三浦でした！

第四章 フェイト 1（前書き）

やっとテスト終わった！

遅くなりましたが最新話を投稿します！

この章では一騎とフェイトが主な登場人物となります！
では、どうぞ！！

第四章 フェイト 1

フェイト view

助かった。

あの少年が助けてくれなかったら私はあの男性たちに魔法を使っていた。

なぜなら・・・

「ヘカート、反応があつた場所はここなの？」

『yes , my master』

そう、少年が助けてくれた直後に魔法晶石の反応があつたからだ。

私は今、町の海側とは反対の木々が生い茂る林に来ている。

『マスター、戦闘が始まる前に一つ確認したいのですが・・・足は大丈夫ですか？』

「うん、ヘカートが痛み止めをしてくれているから大丈夫だよ」

ここに来る途中、また痛み出した左足にヘカートに頼んで痛み止めをしてもらったのだ。

散々反対されたけど、お姉ちゃんを見つける為だと言ったら諦めたように痛みを抑えてくれた。

「結界をお願い、関係無い人達は・・・巻き込みたくないから」

『yes, sir・・・isolation field』

ヘカートの声と共に半球状のドームが魔法晶石の反応地点を中心として形成される。

「ヘカート、drive」

『drive ignition!・・・setup』

黄色い魔力光に体が包まれて次の瞬間には、全身を被うマントを翻し、

漆黒の動きやすいバリアジャケット姿になった。

ヘカートは黒くて大きな鎌になっている。

「行くよ、ヘカート」

ドオオンッ、という激しい音と共に辺りの木々をなぎ倒しながら木の形をした化け物が立ち上がる。

「現地の植物と一体化している、やっかいだ」

『推定ランクはA+ですが油断はしないでください、前回の晶石獣よりも強力です』

「分かってるよ、まずは小手調べだ。フォトンランサー」

『photonlancer・・・Fire!』

黄色い槍状の魔力が五つ形成されて晶石獣に飛んでいく、前の晶石獣ならこの攻撃は当たった。

しかし、今回は晶石獣に当たる直前に見えない壁に阻まれたかのように弾かれた。

「防御魔法が使えるのか・・・っと」

お返しにとばかりに晶石獣が伸ばしてきた木の枝を避ける。

「攻撃の主体はこの枝による物理攻撃かな、でも動きは緩慢だから近接戦闘で一氣に片をつけてもいいかな？」

『私は距離を取って射撃魔法で堅実に攻撃していくべきだと思います。』

マスターは今、傷を負っているのですからそれをお忘れなく』

「・・・そうだね、今回はヘカートの言う通りに、ッ!!」

突然後ろで沸き上がった他の魔力の感触に振り向く。

さっきの晶石獣と同じ姿の晶石獣がもう一体、立ちあがり枝の部分を振り下ろしていた。

『protection!』

ヘカートの咄嗟の判断で発動される黄色い魔法陣の防御魔法

「くっ！なんで？確かに魔法晶石の反応はさっきの晶石獣からあったのに・・・ッ！」

そして感じる後ろのもう一体、初めに対峙した方の晶石獣が攻撃してくる気配

「ヘカート！」

『flash move』

消える黄色い防御魔法、しかしそこには既にフェイトの姿は無かった。

「危なかった、クラスA+が二体も」

『どうも様子がおかしいです。少し様子を見ましょう』

フェイト達がいるのは晶石獣達の遙か頭上、雲の上だった。

フェイトとヘカートが話している間にも晶石獣は三体に増えた。

「これは、複数の魔法晶石があるってことなの？」

『いえ、反応は確かに一つです。どれかが本物でそれ以外は幻影だと思っのですが』

「でも、さっき攻撃を受けた時の感触はそんな感じはしなかったよ？」

そう、確かに感じた私を攻撃しようとする意志とその重さをさつき感じた。

「どこかに魔法晶石の本体があるはずだ。ヘカート、検索精度をもっと上げられない？」

『やってみましょう』

そう言うのと明るく明滅しだすヘカート。

これで魔法晶石が一つしかないのに晶石獣が何体も出てくるという不可解な現象の正体が分かるだろう。

私もどうやってあの晶石獣達を倒すか考えないと……

「あれ？あれは……」

戦闘のシュミレートをしていると見覚えのある人影が結界の中に入ってきた。

「まさか！」

そして、一瞬青い輝きに包まれるとバリアジャケット姿の少年が立っていた。

さっきの、少年だった。

フェイト view end

一騎 view

『既に結界が張られています。他の魔導師が居るかもしれませんが、一応ですが注意してください』

「分かった。カレンには・・・連絡しない方がいいよね？」

『その方がいいかもしれません』

ドオオンッ！轟音をあげて三体の晶石獣が立ち上がる。

『現地植物と一体化してますね、厄介です』

「何で一体化してると厄介なんだ？」

『一体化すると晶石獣が強力になるからです。早くしないと大変な事になります。急いでください！』

「分かったよ。イリス、drive！」

『drive ignition!・・・setup』

青い輝きが一瞬俺の体を包み込む。

次の瞬間には白地に青いラインの入ったバリアジャケット姿に変わる。

『上空に魔力反応有り、おそらくこの結界を張った魔導師でしょう』

「戦わなくちゃ・いけないのか？」

『その必要は無いと思います。ただ、強力な探索魔法が発動しています。』

目の前に晶石獣が居るのになぜ？』

「俺に聞かれても困るよ・・・ッ！」

『p r o t e c t i o n ! 』

「うわっ！危なッ！サンキューな、イリス」

『気をつけて下さい、どうやら晶石獣の方も私に反応している様です』

「分かった」

右手で青い光が弾けて柄に青い宝石の嵌った白い剣が現れる。

「行くぞッ！」

剣を構えて晶石獣がひしめく戦場に俺は飛び立った。

一騎 view end

フェイト view

すごい、その一言でしか少年の戦いぶりは表現出来なかった。

三体の晶石獣を相手にして一步も引かずに対等に渡り合っている。

それにデバイスのサポートも的確だ。

最初の防御魔法の発動も速かったしマスターの動きによく合わせている。

一体どれほど鍛錬を積んだのだろうか、そう考えずにはいられない程の動きだった。

『マスター、あの晶石獣達のカラクリが分かりました』

「ヘカート、それで？どうだった？」

少年から目を離してヘカートに問う。

『まず、あの晶石獣は全て本物です』

「それじゃあ、魔法晶石も？」

『いえ、晶石は一つでした。しかし、晶石のある所が問題でした』

「え？どういう事？晶石は晶石獣の中にあるんじゃないの？」

『はい、そこが盲点でした。晶石のある場所、それは……』

ドオオンッ！

再びの轟音、見ると四体目の晶石獣が立ちあがっていた。

フェイト view end

一騎 view

「くっ！数が多いな……ハアッ！」

斬ッ、と伸ばされた枝を剣の一閃で切り落とす。

『やばいですね。四体目が現れました』

「マジか！？これ以上はさすがにキツイぜ！」

今だってやつと晶石獣の攻撃を防いでる状況だ。

圧倒的に手数で劣っている。

「イリス！何とかならいのか！？」

『・・・今の状態でうまくいくか分かりませんが、武器の移行シフトを実行します』

「移行シフト？」

『はい、うまくいき事を祈って下さい・・・・・・shift、d
uniform』

イリスの声と同時に再び、今度は両手が青い輝きに包まれる。

グオオオオオオオオツ！！

四方から迫りくる晶石獣の枝、それが俺の体を貫こうと迫って来ていた。

第四章 フェイト 1（後書き）

久しぶりの投稿が果たせました！

待っていた読者の方、お待たせしました！（↑居るのかな？）

兎にも角にも無事に単位修得が出来そうでしたよかったですw

感想を下さったけーくん様、夜神様ありがとうございます！

それと一つご報告を、一騎のハーレムメンバーが増えそうですw
では、三浦でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3646q/>

魔法戦記ウィザリア

2011年10月8日14時25分発行